





2 巳

二十九、三十日、朝顔山を脱稿（匿名）
 として新著百種を寄せる同名の作とする全然別種
 として三十日、博文館へ持参して、右陽に
 寄せる。その他軍事小説の復元石の後半
 を、東射砲と改題して出版の事を約して
 内金を得た。
~~中央新聞~~
 中央新聞社とは常に衝突してある。それは
 自分が、~~結果~~結果は他とちがう。併し自
 分は、遊惰の者ばかりではあつた。新聞記

俱樂部にへ寄せる。女房袴し、が又後者の高
 した。へと云つて全然文章体と絶縁して譯す
 無いのが有つた。
 七月二十八日、武内桂舟画伯の定で、硯
 友社小會が催された時、~~戯~~戯画を相撲を取つ
 る。桂舟門下の葦舟、蘆舟、一舟さんど飛
 入し、眉山、愚索の二人は取らぬといつた
 が、紅葉、小波、風谷、らび自分は勿論の事
 取つた。これを讀賣新聞で、数日後の紙
 上、文士と畫家の大相撲、とて発表した。

A 10 20 書 7 新聞記者の生活

了己

○者○生○は○一○身○の○原○氣○を○生○じ○て○、○專○心○著○作○三○味○日○入○り
○あ○い○の○り○で○有○る○ん。

八月八日、社納涼會を芝浦大野倉で開い
れ藤原が、松井柏軒、大岡長峽、幸徳秋水、
津田一舟の五人で某所の一泊。その翌朝、高
輪泉岳寺前の海側の汐湯兼料理店の高輪
亭（この建物は玖波）で、あつが、家業の違つ
てゐる。の二階で朝飯を啜り、午過ぎまでお
んでゐる。

A 10 20 幸己 山田蘭堂日記

け間、我々は幸徳を寄つて集つて振舞つて

興じ合つて有る。幸徳はそれより千家
解を引伸し、掛ける様を、
式を引伸して、腹を立てる。我々の
笑、
（それは大岡は副社長で

あり。松井は藤原の拾つてゐる恩人でも
あり。自分は大角文壇の名を成してゐるの
で、二目も三目も置いてゐる。であつたら
ど、あの優柔不断な見えの男が、後
年彼の大逆事件

一貫首領と成る。今猶別人の事業の成る
我々の取つて意外千萬で有る。思ひ
成る。

No.



詩人視されて

明治二十八年の秋

前々春陽堂より 四の緒と題して、紅葉
の 鷹料理三條 眉山の 左リ禱 柳浪の
白百合の鏡花の 夜半鐘声録を出荷した。
その姉妹篇として 五調子山とくふのそ出す
と就て、田中ゆふ風 柳浪の 柳浪の 柳浪の
さん 眉山の 松風 小杉天外の 塔邊記
とくふのよ、自分そよ加へる。事る成る。

No.

二
六
号

其批評の旨は精意の
は、国民之友、第百廿二號
に際して、八面樓(中山湖
裏子)が発表し、その
硯友社中、その旨は
不利なる位地、立つる
江、水落とす、何と云は
他、作家が概と恋愛詩人
た、同、水落一人硯友
社中の自然詩人なる由る
(中東)七篇悉く無韻の
詩あり、純粹なる東洋
趣味の詩あり(後略)

十二日、初日、水車、陽堂の出版
さる、堂主が氣無がせぬ、年下積りで
れてる、有る。(巻中、收る、現の
星影、夏の館、雪折竹、火山、断橋、温泉
狂詩人、いれ、旧作)これ、慙く文壇的
自分の詩化短篇小説が、確實の認識さる
有る、
少年世界、脱光、自分の冒險小説としての
脱稿、
美女作で有る。

A 10 20 巻 中山湖裏子

丁巳

6
早

正直で ~~再~~ 版と同時の増して道くといふ
 不嫌な事は ~~殆ど~~ 無かつた。
 批評の二三を摘録すれば。
 ◎ (前巻) 君を知れる人の説は君は幾度も
 くりかへして文を繕ふことを好まぬ。す
 く〜と一時の書や終るを常とするが故に
 世想甚だうるはしけらぬ、とすれば行
 文のおんやいさゝか ~~出~~ 出さぬ非ず、さ
 れは君は尤も得意とするは ~~短~~ 短篇として言文
 一致するものありと云らぬ ~~後~~ 後(巻)の文学界

No.

このは紅葉の編輯顧問とくは格で、毎冊自分
 の序文を書き、又表紙の文字 ~~も~~ 書いた。
 自序は ^{九月} 六日、日海獵船 ~~の~~ といふのを脱稿し
 て寄せられた。このは田村江東の録で、品川沖
 の磯泊中の 獵船の帆を訪問して、その ~~獲~~ 銃手
 なる水 ~~夫~~ 夫を 伊けらて、小ボートに便乗して
~~獲~~ 獲獵船を見させて貰つたのは取材した
 ので有つた。
 十日には 水雷艇 ~~の~~ といふ ~~に~~ 遊覧された。
 このは好評で忽ち再版した。(以時分の再版は
 博文館の)

A 10 20 巻 三 川崎新聞社

6 巳

6
P
5

が筆の定まらざるを遺憾かゝるべきのほの見
ゆるあるあり(後巻) 青年文
 水産の筆力はむしろ短篇よりも善く見え
 たり(後巻) 早稲田文学
 〇(前巻) 水産は甚だし詩人あり、ウレが
 脚本よりも小説もりのするの腕は、い
 ずかそよりとす。能はざるも、その詩趣
 は富めるの詩篇に至つては、甚だ振解ぶ
 るものありと亦す(中巻) 詩趣は善くあ
 るもの甚だし三分の一は居りぬ。益々この

No.

詩 意

6
P
5

〇(前巻) 吾人孰々水産を観察するも、其
 人物大に他の硯友社員に劣るやを覺ゆ。
 著作として著し作者の性質を現けずある
 ば、彼が著作の多くは無愛相として、恋
 をほするもの高き車輪分子を含まざる
 を以て見れば、水産は夫れ一篇無邪氣の
 有鹽稚兒ありざるあり(中巻) 水
 産の一篇何の異ふ何の奇あり、れ
 ば、其の極所は事せざるの文の下は、
 一片抑々べからざる熱誠あり、自づから

A 10 20 青い 三行 三行 三行

7 己

能くあり。 (中略) 昔もくは彼今新聞
 たり。 (中略) 白鶴のやうく樊籠はあ
 るに異ふらんや。 (中略) 中略は戦争中の
 詩趣を歌へる好詩篇あるやあど、多
 くは感傷に、奥地に、徒ら戦争の記事を
 類するものあり。 (中略) 然らざれば四
 分の一位は詩として評すべきあり。 (後)
 (略) 日 帝國文学
 一方は於て詩人視されて、詩才を認めらる
 べき日 水車山 谷が 日 水車山 を発表せる際

No.

号 6

詩趣を以て進まば、前運の多量より自
 愛せむ。 日 沙文学
 ① (前略) 水陸の深刻なる実害の筆はく、
 まれ圓滿なる理想の筆ふし。然れども其
 筆詩趣は富みて、多少の氣概あり、故に
 我は小説家としてより日 寧ろ詩人として
 之を歓迎す。 (中略) 水陸は詩人せ、故
 に長篇より寧ろ好んで短篇を作る。 (中
 略) 情あふくは推敲と苦心とを欠ぐ、こ
 れを以て一寸器用なりと、深く徹する

A 10 20 年 日 日 新聞紙記者

己

俗書より新聞小説を単行本として出版せざる

を得ない場合は立到これつん。無論それは結構興資

ともしも必用で有つたけれど、折角世間他は二原因の有つた

詩才を認められ掛つてゐる際、何ん原何ん

で地方新聞より探偵小説は一冊と纏め

て世に出してゆく方がいいな。けれども自分は丸

角杉浦先生の義体カブレがしてゐて、人

の窮乏を見ては捨て置つた方がいい。既に之

で高瀬文庫、北村三郎其他の者、之と中

の補助を與へてゐる。今又、同社の関戸

A 10 20 巻七 川原田村家

浩園が、不義理の金借(十円)を呑んでゐる
ので、今まで躊躇してゐる俗書物を、青木高
山堂へ賣る事(其頃として十円は我々は大金糸の位)。
即ち九月十日、女の
顔切を十五円で引換へた。

嵩山堂は元東大阪の書店だが、小説出

版の野心を持つて、東京の支店を設立して初め

出版し、又露伴物をも引受けて、昔々当つて

ある。へ浪六の事で、春陽堂と衝突して、事

はあ、速べん。自分は中央同社の村松柳江

No.

歌

102

如才^{（？）}おのつん。(芝居道の先生、
 価値無き事は知りやうなり、
 子供の時は讀
 ん草双紙の作者のみ、却つて自分
 の時を讀
 呼ばれぬと就ては、譯^{（？）}もよく
 讀^{（？）}く嬉しく有つ
 ぬ。
 著作は、^{（？）}あつた新聞の記者
 として有つた
 ので、教師、假名垣魯文の
 逸話などして、教
 育^{（？）}に寄つて居る。
 一冊は、新編の表方で中村梅
 庭の^{（？）}つと
 知つて居る、^{（？）}其^{（？）}後
 久保田の二^{（？）}冊
 を借りぬ

No.

有るのつとあり、^{（？）}野島
 俊輔の編輯者で
 狂言作者としてより、^{（？）}オ
 方で廣く人を知
 らせて居るので、同誌の
 編輯欄で時々^{（？）}發表
 される藝人達の^{（？）}精
 神生活振奮、自分は一
 時^{（？）}の
 會見する機会を得たりと、
 非常な^{（？）}嬉しく思
 ぬ。
 今戸^{（？）}の^{（？）}布
 袋のやうな^{（？）}人
 であつた。
 始終はニコク^{（？）}と
 極^{（？）}打解けを語る風で、
 分^{（？）}の向つてあつた、
 先生と呼び、^{（？）}を
 する。

A 10 20 第三 日記

113

物ととりふ事^三成り、會計の磯村某が橋後
 一で、今尚ほ^三圓朝の人情嘯と掲載する
 事と成つん。その^{他人の}今日では有名な^口名人長
 次^口で有つん。その^{他人の}連記でりふく、圓朝自
 身^口執筆し^口り^口で、字体など字の^口筋^口で
 有つん。挿畫は一舟が畫いてるん。
 然^口し^口の關係が^口一舟—梅翁—彦
 作^口の名人長次^口を五代目菊五郎^口、新編部
 で演^口じ^口し^口る^口事^口に成つん^口が有つん。
 社^口と^口しては宣傳^口に成る^口が、大氣^口を有

No.

りんが、この梅翁は中村芝翫の弟子で、今の
 新右衛門の實妹とロマンを作つん^口が、
 破門^口されて、その^口が^口舞台^口外^口で働き、一
 時大阪の劇界で、^口奥^口後^口と^口鳴^口り^口し^口が、後^口
 帰^口京^口と^口して^口表^口で^口重^口要^口な^口役^口を^口勤^口め
 て^口る^口ん。今は故人^口。
 中央新聞^口は元来、桃川如燕の^口講^口談^口で当
 つて^口る^口ん^口が、新聞^口と^口して^口講^口談^口連^口載^口の^口元^口祖^口
 だが、^口戦^口争^口で、紙^口面^口が^口狭^口く、一^口時^口休^口載^口さ^口し^口て
 め^口ち^口が、その^口が^口そ^口ろ^口と^口下^口が^口ら^口で、何^口の^口講^口
 誰^口の^口

A 10 20 書山 三野屋

12己

いづれの一才指指位は交りしけり。現
 在ほど文士と俳僧とが接近してゐるが、ついで
 で、(劇通側の文士は別として)唯、吾輩がけりを見
 て引んちりて有つん。
 二十日は新屋敷の初日有つん。(今の六
 代目常五郎は未だ少年で、八大傳の富山草
 刈の臺、後藤では徳女を勤めてるん。今の
 街門、梅幸、大根で、歌右衛門、福助の人
 氣漸く下り坂の折有つん。)

No.

つん。主は世衛の當つんのは、當時の社会部長
 (然るに呼ばふか。つん。三面主任)村松柳
 江で、自分も陽のつん。
 九月三十日は新屋敷の茶屋(先名)
 で、龍を加内長三郎、世他と會見しん。
 十月十七日は新屋敷の大ざといふりで、立
 會として柳江一舟と若行、三階で初め、
 常五郎、芝翫、福助(歌右衛門)、常之助、栄三
 郎(梅幸)竹松(羽左衛門)松助、市村(先代)
 調等の立會を見ん。圓朝とけ時一才齋を
 (先代)

A 10 20 巻三 劇通側の事

17己

鹿嶋紅茶の女顧問といふので、紅葉の話を
 有つて。 可成り 武内と
 可成り出取合と川上と君との四人を替身
 員の中に入れて置く事よ。といふ事がある
 十月六日の廿五舞伎新報社の園遊会が、向
 嶋白髻附近の鹿嶋別荘で催される。自分も押
 替音機が社を船来する頃で、その甲
 十郎、小文字、園遊会などの喜曲が吹んで有
 つたのを珍しく聴いて有つた。

No.

鹿嶋の園遊会

明治二十八年の晩秋の下

鹿嶋唯一の機關雜誌 廿五舞伎新報社は、此時
 代々の例の新川の四間を、鹿嶋清兵衛の牛車
 渡りである。 彼の 道楽とて、一方は字裏の玄鹿
 館を設立し。一方は ~~新報社~~ 歌舞伎新
 報社 ~~を~~ 経営した。後者は専ら 園野の水(碩)
 が当てる。雑誌の体裁も前とは異なる
 る。 (本紙摺り書き。字も版挿入。日本紙印刷。)
 色摺表紙。

A 10 20 鹿嶋新聞社

14己

進帳を利のせ (結) 女化の名を附けて、言羽名

運動場には葎葉張の茶店を出て、櫻餅を勧

内函市、中村福助、其他

◇俳優側 — 尾上菊之助、尾上栄三郎、市川新

◇劇壇側 — 河原崎權之助、田村成義、

永井素岳、久保田嘉彦、新井半三、其他

芳楽、新川国松、右田年英、其他

◇画家側 — 武内桂舟、富岡永先、落合

関根黙庵、鈴木幸兵衛、其他

村松柳江、三木竹二、小林屋氣樓 (天龍)

居松葉、高山樗牛、幸堂徳和、右田寅彦

No.

この日は、文壇劇壇の知名の士の他に、諸人

8一版所は大概揃った。藝妓側では例の有名

ふ、おん太、おん人、さびめ、おど、おど、おど、有名

それらは全盛を極めたりを有った。

其等會者の主たる者は (●点は故人)

◇文壇側 — 福地櫻痴、森鷗外、森田思

軒、小中村義象、黒川真頼、宮崎三味

巖谷小波、伊原青々園、條野排菊、田辺

蓮舟 (六一翁) 若菜貞雨、川尻宝岑、松

居松葉、高山樗牛、幸堂徳和、右田寅彦

A 10 20 書名 川原崎權之助

既2 0点は現存

15-3

物に故事のゆかりのな、教養は新紙上の後の細工だ
 てるて、落語家年枝の砂文字。圓録の大道講
 釋。高橋の一人角力。圓玉の阿呆陀羅經。圓
 三郎の書生跡。猫遊の館家の物真似。久之助
 の盲女。常盤の居合技。源水の獨樂。花子の
 新内。そのは梅坊を一籠のカッポ。それが
 俳優を前に列べて、怯みも懐を仙代松の
 床下の大芝居、足首は縄を結いつけて、
 の引ひきを見せると、人と食つてゐる
 が、大出まが有るん。

A 10 20 巻二 三郎高橋新紙

世に藝人として顔の見えりのは燕枝(先代)
 伯知、米板、圓太、圓遊(先代)等。

No. 三代目 圓報

夕方、大廣間で勸進帳見立の折詰、酒
 丸が、け席上で面白い。対象を見ん。
 それは文壇劇壇の老大家、福地櫻痴居士
 と並んで、青書生が一人坐してゐる。昨日
 は大概、叙附で、めいしめんで行つてゐる中
 本館の、
 一青年が、特々目立つて見えてゐる。有るね。
 ありが、高山林次郎だよ。と誰かの教

ア三

人で植物園の裏通りや、葉鴨方面へ入る。殆
 ど雑木と芒との世界で、現在の如く家屋は櫛比してゐる。
 かつね。葉鴨刑務所が赤いサ落成してゐる。
 かつねが、世阿弥の畑から芋と大根とを失敬
 して、それを四人で交代り擔いで、音羽の
 赤城へ出て帰來した。
 この明るる日(十一日)後、黙禪の紹介で
 山形の文学青年が訪問した。それが羽太銀治
 (醫學博士)ふりが有つた。
 新田も岡戸も前後して中央の道を歩いた

No.

小舞いをして、郭公を教養する目的で、先づ、小石川
 上宮坂町に眉山を~~訪~~訪へて、同家は其頃
 高瀬文淵が同居してゐる。例の暗潮を執
 筆中で、人生活の暗黒面描寫を就ては、皆文淵
 の書藝を提供したので、或る場合は口授し
 て、手記筆を指しやるまでして書かされた。
 此と文淵の自分も聴いてゐる。
 眉山は既に式時分り、因りて
 懐疑哲学は、
 伊藤の松ヶ枝の脚註の仕事を免れ、書中バイロンの詩を譯し、
 二、三人とも誘引の筆下をかつねりて、執筆す。

A 10 20 書 記 録 簿 第 四 冊

19己

一と春陽堂から出す事と契約して、十一月の
 四日は三十五四の原稿料を得た。これは水
 車に当たるので、二の矢をとりふりで、ま
 としては事自ぬ田嶋山が(春陽堂)新小説の
 編輯主任で有るに当たるので有る。
 利根川圖誌を豫て愛読し、是非水
 御の初冬の景色が美しく成つた。(其頃はあ
 今の水御を味嗜傳うたを居るあかつた。
 一自分より一進先は徳田葎花が一巡した
 事を後を知つた。その利根川沿の風景

No.

静養の
 自分、師の食客と成つた。
 (関戸は途中で)つた
 水郷の旅
 明治二十八年の初冬
 中央新聞の日は、軍事短篇小説を止めて、
 その代へて、時代物の短篇小説、多岐普遍
 の一通信味を飽へた。一短篇を連載して
 水郷の聲と題して、単行本と
 水郷の聲と題して、単行本と

A 10 20 水郷の聲 利根川沿の風景

20己

ふ地名をこふん、まと脇假名を附けたのを有
 川の榎梅がある。それは小説中、小文間とい
 りふ、時物を書いた。こゝを就て自伝とい
 び、女実地を舞台として、利根の船と
 川の香取詣でを、川の、利根で清涼し
 十一日は、麻嶋詣で。雨中を津のゆよ、そ
 りで有る。小舟で
 歩で阿波村大杉神社。須賀津の龍舟の船頭
 舟、~~舟~~、霞ヶ浦の般び、夜に入ると朝
 来入った。以時位詣境は親しく、事日無い
 ので有る。

No.

とて時々長篇小説を書くといふ條件で、社
 会も幾分の補助を受けて、八日の朝、~~橋~~河出
 り、川蒸気に乗って出立した。
 流山に上陸して、~~傳~~詣神社、~~詣~~布施の
 弁天を詣て、~~の~~一泊した。
 九日は、谷子橋門の傳都へ但し、それな他
 在る、~~の~~を訪ひ、引返して、布川の、~~取~~江の
 旗亭に一泊した。小文間、~~の~~香銅川の船を
 使して、利根本流を布川の降つたのだ。
 十日は、川蒸気で押砂を下り、さうして又徒

A 10 20 東山 川原町

21 己

水戸が小文間の古城の事を小説を書きまし
 が。小文間は「をんま」と讀むのは誤りで
 昔は「こじん」と呼んだのが正しくさうで
 と自分の出鱈目を正統だと信じてゐるの
 有つん。此時ばかりは實に冷汗が背中から
 流れるの有つん。

今更な嵩山堂とは、通信社へ「カモ旧伝」
 ばかり傳へてゐるが、新伝をとりかへるの
 べり大軍艦といふ、海軍志願の志士小説を
 三日間で書き上げた。(後、単行本)

No.

つん。すると其地の讀者が「をんま」と讀
 むの位と教へて来る。直ちにその股袋すれ
 ば、おつんの位か、其所が着氣の至りで、自
 分の考証調査が粗漏ふのが暴露するのを恐
 れて「イヤ古書は従ふと、昔は「こじんま
 と讀んどの位と讀張つんの有つん。それか
 ら指年の後、再び釜割川の船を備へて、布川
 ままで下江する時、土地の役場員り一人は便
 箋を許して、四方八方の話をしてゐると、彼
 は自分の何者なるを知らぬ儘に「先年江見

A 10 20 春の川原

223

の新年附録を書く事已成つた。
 この附録は国木田獨歩の弟~~田村~~収二(録^録介)
 が^{田村}国民之友の編輯をしてゐたが、田村
 は国木田兄弟と親交が有~~り~~、^り、~~その~~
 自分へ橋渡~~し~~を~~した~~り^{で有る}。
 之^をふま^げもよく同誌は唯一の晴の舞台で有
 つた。が、自分~~と~~は、今更^に国民之友^にで
 名を出さず^も有るまい。頼^りを^もた^らず^も、今
 まで^もた^らず^も有るべきが、~~と~~い^ふ様^に、慢^心を^もた^らず
 二指^してゐる。

No.

22

224

水郷^に書^きて^は新^文壇^に入^り、^日潮^来曲^に
 と^りふ^のを^書いて^送つた。(後^に身^を女^子と^改
 題^し)
 後^に又^に日^潮来^曲に^を書^いた^り、^日水^郷
 の^院の^收獲^で有^つた。
 奮^闘 又^奮闘
 日^明治^二十^八年^の年^末
 日^太陽^と日^小品^文に^かき^を寄^稿した。^日その^日
 日^田村^江東^にに^を利^いて^日国民^之友^に
 A 10 20 書^き 日^三日^記

2了已

俱楽部へ送る日めで、十八日からは尾水清
 水の筆を起して、一巻より尾水の巻二十四枚
 を書いた。十九日は十一枚。
 出社より、来客より、~~忘年会~~忘年会より
 げらりして間を抜き、二十五、六の両日では尾水清
 水は^{全部}脱稿した。或る程度まで^{全部}脱稿を、或
 る程度まで空想の作紙を有つたが、^{全部}脱稿
 と誤解されて、紅葉までがその位位り
 は困つた。

け一年の著作の収入は八百~~〇三~~円六十

No.

相手の尾崎の書生の白水や、文芸家の星野天
 知や、女の一葉、早稲田の宙外らして陣中で
 は張合が無いぢやアあいか。俺を巻頭に出す
 りさう書いて遣つた好い。
 今日から考へると汗顔の至りだが、何しろ
 然るに白身息で有つた。それは一と二とよく
 承認するつもりで、十日、十一日、十二日は
~~出社~~休社、十三日の三日間で書き上げぬのが
 焼の煙で、中原稿料は十円で有つた。
 今年の~~筆~~筆を起す^{文藝}の文藝

A 10 20 尾崎新全集

24己

一七〇 国民之友 第二百六十八號で
 著者 内田海舟 六号文字ニ 既組
 二百頁を亘つて細評しれ。
 (前書) け人事の自然を 寫すは 易し 至難
 可して尋常作家の容易く筆を善くしる
 所は あり ず。而して水陰偶々成効せし
 は 我が讀書界の 喜ぶ 處也。要す
 るに け 女房 稿し け 近日の 著り 成効し
 たる もの。一可して水陰の 声名を して
 頗る 二三段階 越せし あり たる 事

今に至るに至る
 眼中に容れざる

A 10 20 第三 川原田村記

女房 稿し け (文藝の 俱樂部) 十月號) 對
 取得意の 時代
 明治二十九年の 初春
 トの 一小部分と成つん事は 後を 語る。
 一 け 高利 稿し け 紅葉の 金色夜叉の ヒン
 の 他 け 森田 稿し け 高利 稿し け 借りて あり
 収入の 多い 一人で 有つんが、 所以で あり 入賞
 け け 引出し け け 時代の 文士 として あり
 田 稿し け け 叔父 保管の 江見 家財 あり 三百

25-3

男

を信じて其長所を擧げて江湖を推薦す

(後略)

二十九年一月一日、年始の序で中央新聞社へ

行つた。(三ヶ月は休刊)誰かあるよかつたが、

此所で休むする間、新聞廣告で見れば某

雑誌の女房持しらの批評があるのを、早速

買つて見れば、其雑誌の名は古くはたが、女全

文は、田園小説の文集、雲のちまき、

輯めがある。——小湖庵の匿名で発表された

ので有つた。

A 10 20 著 川島雄三

微細

これは非常な長文で、又多大の同情を以て
評論を加へてゐる。

No.

(前略)我平生甚だ水蔭の作を服せり、

此篇を讀むに及んで、士三日不見の感

亦くもばあふ。此篇の結構、整然肌理

乱れず、篇中の性格悉く描き得て、活潑せ

る、近時の諸小説中、一葉の隅江口と共

に、推して以て有数の傑作とすべし。水

蔭の筆端は景を写すに長ずと稱す、而

れども猶觀察の緻密、筆致の精細ありと

...

26 己

号

あきは少々すれどその辛防と覺え
 か讀得せよはいのさる能く書りしと相
 違無し水陸の作中にては上々其の
 るべし人はにぎり江の軟べて下る在
 りといふと虽も其は唯筆行きのみの評
 はあかざるのみれは俄に同意し難し何と
 んればにぎり江は繼し出来損ふとも
 猶見ふるべきありとれども女房給し
 に至つは出来損は、殆ど見る境へさる
 べきものなればあり言約もれば女房給

No.

号

いふは留ぎつりき。而れども叶篇の文
 至るは、情景兼到る、精采の爽々たる
 覺ゆ、清浄な景の文はあらざるあり。
 又、めざす草の第三巻、正太夫が全
 剛杆の ~~ていふ方ハツキ~~ せ一叙分。
 (あき) 一葉の にぎり江の水陸の女
 房給し、其れはあはれとけ程一讀した
 りぬ(中畧)のめれは太水陸の作を取
 りず何となく間のあきたる處ありと讀む
 に中々の辛防あり、女房給し、その間の

A 10 20 春の 日記

と早稲田の春はみ玉ぶぶら常盤松とては銀

之ゆり勤めし事あり

正木夫事常盤緑雨はバ頃キツイ一葉びらき

で有らん。張つてあるゆゑと我々は笑つてゐる

同ドのめざす草は帰休庵の名で森野外

評を下らん。

(前巻) 興有る話とて、全篇トオデエが

羊かひは似たり。真次が花見がへりの娘

を背負ふところでは名高キシエツエ

ルの「エツカレド」あと思ひ出でる。

A 10 20 善山 三田園集

二
サ
デ
字
号

(前巻) 江見水陸は惟
昔日の江見水陸はあが
前作の女房持し既之を
証す。山灰煙の煙は於て
猶ほ見るべきもの多し。
多し。縦令の赤心山賦
に胚胎したるものや
明の江見水陸の特色を現
したるは、縦令として輕ん
おへるが、(中巻) 近日常
は見る絶好文字あり。(下巻)

己
28

これを作者の修辭の上を於ては、われ

憾なきこと能はず。(後巻)

水雷艇の女房持しその

焼の煙は矢に南問題のさしを有らん。

自殺を企つ

明治二十九年の盛春の上

自分の二十九年の日記は一月二十日

えてろつん。そのは

自

No.

日記

この江の島滞在中、内瀬の二の島居跡の
 貧民荘のありさまを見附けて、不圖自分は思ひ
 着いた。生活を一変して見せよう如く、
 自分と別居して、け所で一心に著作して、
 何と死ぬるもなほよいといふので有つた。
 別居してゐるうちに自分も改換するつもりが、
 老母の氣持も少しは和ぐかと思つた。然るに今へ
 んので、紅葉桂舟小波の三人、その母が親類
 の二三とも打明けて相談して見ん。
 親類の者は一番能く老母の現情を察し、
 現

No.

すゝとせしへ、田一舟が来るので、自
 校は一先づ中止とせん。
 け金屋樓の籠城中は、次の室へ昼食の客が
 来て、女中を捕へて可成り打解けた事、
 聞いてゐる。その時、興津屋の
 高山樗牛で有る事が知れん。
 方では氣が着かぬ、かつん、自分
 康島の園遊會で顔を知つてゐる事有つた。
 金屋樓の若主人秋人の紹介で、自分は彼の室
 を訪ねて、少時間語り合つて見せん。

A 10 20 日記 日記



